世界遺産学習を通した郷土愛の醸成

―守られるから守りつなぐ・学ぶから広めるへ―

橋本市教育委員会（和歌山県）

１．はじめに

橋本市は、和歌山県の北東端、紀伊半島のほぼ中央に位置し、北は大阪府河内長野市、東は奈良県五條市に接する緑豊かな田園都市です。市域の北部は和泉山脈が、南部は紀伊山地から派生する山々が占め、その間を貫くように東から西へ紀の川が流れている。

「橋本」の地名は、天正 13 年（1585）に応其上人が荒地を開いてまちをつくり、その２年後、紀の川に長さ約 236m の橋を架けたことが由来となった。また、高野街道と伊勢（大和）街道の交差する交通の要衝として、高野山参詣者の宿場町、産業の集散地として栄えてきた。面積は 130.55 平方 km、人口は令和８年２月 28 日現在 57,881 人で、産業としては、豊かな水と温暖な気候を利用して、柿や巨峰を中心とする果樹栽培や養鶏が盛んに行われているほか、養鶏による卵の生産、紀州へら竿やパイル織物は大変有名である。2016 年には、紀伊山地の霊場と参詣道の一部として黒河道が世界遺産に登録されている。

紀の川流れる橋本市中心部

２．教育目標

橋本市では、「第３期橋本市教育大綱（2023 年度～2027 年度）」を策定し、「人が学びあい、共に育むまちづくり―自治と協働のまち橋本市に向けて―」の理念のもと『豊かな心と健やかな体を育みます』『家庭教育・学校教育・社会教育の中で多様な学びを育みます』『地域・家庭・学校が連携した地域教育力を育みます』という３つの基本方針と、13 の重点目標を定めている。重点目標の中でも【持続可能な社会の創り手を育む教育（SDGs・ESD）を地域と協働しながら推進します】【共育コミュニティと学校運営協議会が連携・協働し、大人も子どもも学びあう場づくりを推進します】という重点目標をつなぎ合わせながら、多様な学びを通して、地域教育力を育むことを推進している。

３．教育委員会・学校での取組

【橋本市立清水小学校の取組】

清水小学校では、例年、登山ルートに世界遺産の黒河道（くろこみち）が含まれている国城山登山を全校児童で実施している。登山を実施する目的は、地域の歴史的資産を歩いて体感し、自分たちの地域をより深く知るためである。

また、世界遺産学習と連動して、６年生が中心となり黒河道の整備(草刈り)を実施した。草刈りを行うことにより、児童は世界遺産を「守られるもの」から「自分たちも関わって守り、つないでいく」として捉え、「地域にある世界遺産・黒河道を持続可能な状態で守り伝えること」を意識した取組を進めてきた。

また、同校は、世界遺産学習での学びをより深めるために、和歌山県世界遺産センターが実施する「次世代育成事業」を５年間継続して活用している。低学年から続けてきた地域学習を基盤に、

世界遺産学習を通して地域の良さを実感できるようカリキュラムマネジメントを行い、郷土愛を育むための取組を行ってきた。今年度は、①現地学習までに調べ学習を実施、②調べ学習で得た情報をまとめて学級内で発表、③高野山での現地学習を実施、④調べ学習や現地学習で学んだことをまとめて５年生に発表、⑤黒河道に対して自分たちができることを考える、という流れで学習を進めた。③の現地学習は、黒河道以外の世界遺産を身近に感じる大きなきっかけとなった。

現地学習の様子

現地学習の様子

【橋本市立西部小学校の取組】

西部小学校では、「高野山の麓に位置する橋本市だからこそ、世界遺産について深く学び、その良さを知ってほしい」というねらいのもと学習を進めた。将来的には、児童が高野山や世界遺産の価値を周囲に広められる存在となることを目指している。一方で、高野山を訪れたことのある児童が少ないという現状から、「世界遺産が身近なものとして捉えられていないのでは」と考え、世界遺産を少しでも身近なものとして捉えられるように学習を進めた。

こうした背景のもと、和歌山県世界遺産センターが実施する「次世代育成事業」を活用し、専門的な知識や背景を詳しく学んだり、現地学習や世界遺産に関わる方々から直接話を聞いたりした。

また、高野山での現地学習以降は、現地学習により出た疑問などについて世界遺産センターへのインタビュー活動を実施した。これにより、児童が世界遺産について主体的に調査し、自分たちの考えをまとめて、授業参観で発表することができた。インタビュー活動により、疑問点を解決したことや、主体的に活動できたことによって、児童は世界遺産が「存在している」だけでなく、多くの人々の努力や思いによって守られてきたことを実感することができた。

現地学習の様子

授業参観の様子

４．おわりに

２校の取組は、登山や保全活動、現地学習やインタビューといった体験的な学びを通じて、世界遺産を地域の誇りとして捉え直し、次世代へ継承していく意識を育む点で大きな意義があった。次年度以降も、学びを継続・発展させることで、地域の世界遺産を支える人材育成につながることが期待される。

本市としては、各校での世界遺産学習をより学びの深いものにしていくために、活用校が固定化され、活用校数も減少傾向にある次世代育成事業の活用を拡充していきたい。展望としては、市内小学校では５年生に緑育推進事業(高野山寺領森林組合との連携)で自然環境・林業を学ぶ基盤があるため、５年生=自然、６年生=世界遺産と系統立てた学習の流れを構築できるよう、市教育委員会と和歌山県世界遺産センターとの連携をより密にし、学校への周知・調整を進めていきたい。